第３３回防衛問題セミナー議事録

１　日　時：平成２８年６月１７日（金）１８００～２０１０

２　場　所：登別市民会館大ホール

３　講師及び講演テーマ
　講演１：自衛隊の災害派遣活動～東日本大震災の経験から～
　　陸上自衛隊北部方面施設隊副隊長　中田　茂喜
　講演２：幌別駐屯地～地域と共に～
　　陸上自衛隊第１３施設隊副隊長　　小竹　義之

４　議事録

【主催者挨拶】

（北海道防衛局長　山岡　博幸）

皆様こんばんは。本日はお忙しい中、また雨でお足元の悪い中、お集まり頂きありがとうございます。主催者を代表して、できるだけ短く簡単にご挨拶したいと思います。皆様ご承知のとおり、熊本地震から２ヶ月が経ちます。まず、皆様のお心の中にあると思いますが、亡くなられた方々に対して哀悼の意を表しますとともに、人的被害あるいは物的被害を受けられた大勢の皆様にお見舞いの気持ちを捧げたいと思います。この熊本地震におきましては、ご承知のとおり陸上自衛隊北部方面隊から、４，０００名を超える自衛隊員が派遣され、救命活動や生活支援を精一杯全力で行いました。本日はこの災害派遣をテーマにお話をして頂きますが、皆様にご理解頂きたいのは、災害派遣は被災地で活動している自衛官だけではなく、その自衛官を北海道から熊本へ送り出したり、あるいは支援物資や輸送経路の確保を後方から支えている自衛官も北海道にはおります。また我々防衛省の事務官も災害活動に対し最大限の努力をさせて頂いてます。本日のセミナーは、５年前に起きました東日本大震災、この災害活動の現場で実際に救助活動に参加された北部方面施設隊副隊長の中田１等陸佐に生の声をお伝え頂きたいと思ってお願い致しました。本セミナーが、我々防衛省・自衛隊の活動を理解して頂くことだけではなく、地元の住民の皆様に、災害に対する意識を少しでも高揚できるように役立てて頂ければ幸に存じます。また、災害派遣に限らず自衛隊の活動は地元の皆様をはじめ地方公共団体のご理解とご協力がないと成り立ちません。このことから登別市に所在する幌別駐屯地第１３施設隊副隊長　小竹２等陸佐に、幌別駐屯地の役割、活動及び地域との連携についてお話をして頂きますとともに、幌別駐屯地の有志による太鼓チームと登別市民の太鼓チームによる演奏会をお聞き頂きます。最後になりますが、防衛問題セミナーの開催にあたり、登別市長をはじめ、登別市のスタッフ、商工会議所、及び自衛隊協力会など本日お集まりの皆様に多大なご後援とご協力を賜りましたこと、この場をお借りしてお礼申し上げます。北海道防衛局としましては､今後もこのように防衛問題セミナーなどの場をお借りして、自衛隊の活動や防衛政策などについて皆様に丁寧な説明を心がけていきたいと考えております。引き続き、ご理解とご協力頂きますよう重ねてお願いし、私からの挨拶といたします。本日は本当にありがとうございます。

【後援者挨拶】
（登別市長　小笠原　春一　氏）
皆さんこんばんは。北海道防衛局主催の第３３回防衛問題セミナーの開催にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。まずは大雨の中、このように多くの皆様にご来場頂きましたことを、市を代表いたしまして心から厚くお礼申し上げたいと思います。本当にご来場ありがとうございます。本日は、青山室蘭市長、戸田白老町長、更には倶知安町から鈴木議長はじめ８名の議員の皆さんのほか、千歳市からも何名か来て頂いております。市内だけではなくて近隣、更にその輪を広げて今日ここにご参加頂きました。今日は素晴らしい内容をお話して頂けると私もお聞きして、非常に楽しみにしているところであります。北海道防衛局が主催する防衛問題セミナーは、この登別では初めての開催でございます。数年前から色々と要望させて頂いて、本日願いが叶いました。今日ご講演いただくお二方の話を聞きますと、開催して良かったと必ず皆さんに思って頂けるかと思っております。皆さんご存知のとおり、この登別市には第１３施設隊の幌別駐屯地がございまして、実はこの会場、登別市民会館ですが、昭和５７年に防衛施設周辺整備事業の補助を受けて落成した施設であります。登別市と防衛省そして自衛隊との非常に深い縁の中で、開催して頂くこととなり感慨深いものがございます。近年、国内の自然災害が頻発しております。先ほど、山岡局長からもお話がございました熊本地震につきましては、幌別駐屯地第１３施設隊の約５０名の派遣隊を含む約４，２００名もの自衛隊員の方々が、北部方面隊所属の一員として派遣されました。５月中旬までの間、被災地における救援活動、そして生活支援にご活躍を頂いた方々でございます。本日のお話は、東日本大震災における自衛隊の災害派遣活動について北部方面施設隊の中田副隊長、そしてわが幌別駐屯地の第１３施設隊小竹副隊長から幌別駐屯地についてご講演頂きます。実はこのお二人、登別市民であれば誰もがわかる姉妹都市であります宮城県白石市、その隣に島田町という町があるのですが、その島田町に所在する船岡駐屯地出身でございまして、白石市の風間市長をはじめ、多くの白石市民のことをよくご存知でございます。そういった縁もございまして、非常に身近に感じるお二人でございます。今日素晴らしいお話、どうぞよろしくお願い申し上げます。長くなりましたけれども、この講演後には、わが幌別駐屯地が誇る北海自衛太鼓と、地元の市民太鼓チームによる演奏もございますので、どうか最後までお聞き頂いて、堪能して帰って頂きたいと思います。改めてこの席に皆様方が来て頂きましたことを感謝申し上げますとともに、本セミナーが有意義な時間になりますことを祈念申し上げましてご挨拶に代えさせて頂きたいと思います。本当にご来場どうもありがとうございます。

【講演１】
（陸上自衛隊北部方面施設隊副隊長　中田　茂喜１等陸佐）
皆様おばんでございます。ただいま御紹介を頂きました南恵庭駐屯地に所属しております北部方面施設隊副隊長の中田と申します。よろしくお願い致します。皆様におかれましては日頃より、自衛隊に対しまして深いご理解、ご支援、ご厚情を賜りまして誠にありがとうございます。また、このような機会を与えて頂きました関係者の方々へも深く御礼申し上げます。更にこの度、然別演習場における小銃の実弾事故に関しまして、皆様にご心配とご迷惑をおかけしたことに対し深くお詫び申し上げますとともに、同じ北海道の部隊として、二度とこのような事故が起こらないように日々精進をして皆様のご期待に沿える施設隊を育成していく所存でございます。引き続きご支援、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

さて、先日、本防衛問題セミナーを主催する北海道防衛局から、東日本大震災における自衛隊の災害派遣の経験談を皆様にお伝え頂きたいというお話がございました。私は当時、災害派遣の現場に施設群長という立場で勤務しておりましたので、つたない内容ではございますがお話をさせて頂きます。

さっそく表題につきましてお話をさせて頂きます。お話させて頂く内容はご覧の大きく４項目でございます。皆様ご承知のとおり、平成２３年３月１１日に東日本大震災が発災いたしました。通常、自衛隊の春の人事異動というのは、３月２３日に行われるのですが、この時は震災の影響で不定期に行われました。この写真は、私が４月１９日付けで着任をして、群長を拝命した石巻の総合運動公園です。この建物ですが、私が着任をしてから６月２４日に自分の駐屯地に戻るまで勤務した施設群の指揮所です。まず、私が何者かということについて、簡単に自己紹介させて頂きます。私は防大の２９期で土木工学を専攻しました。職種は幌別駐屯地と同じ施設科であります。生まれは、なぜか富良野市生まれで、高校は茨城県の高校を卒業しました。榊原郁恵さんの方が有名ですが、旦那の渡辺徹と高校の時からの級友で、いまだに付き合いがあります。趣味ですけれども、最近ゴルフを始めました。やっと１１５くらいの数字が出るようになりました。あと、元々東京生活が長かったのでジャイアンツファンでしたが、北海道に来てからは日本ハムファンになりました。あとはカウンセラーの資格を取らせて頂いてます。これは、板野友美さんです。ＡＫＢの話をしますと、私は、偉業を成し遂げたイチローとＡＫＢの初期メンバーは同じ努力する人だという風に捉えています。最初、２５０名のステージにお客さんが７名しかいないところで、涙を流しながら歌ったり踊ったりしたのは、彼女達のスタートです。努力して、今の地位を勝ち取った人達です。皆さんの目を潤すものとして活用させて頂きました。私の勤務歴ですが、幹部候補生学校を卒業してから、第７施設群という京都の部隊に配属となりました。その時に自衛隊で初めてのカンボジアＰＫＯが派遣されました。その後、平成６年には兵庫県伊丹にあります中部方面総監部で勤務した際、阪神淡路大震災に遭いました。私は宝塚の官舎に住んでいまして、非常に自衛隊官舎は古かったのですが、倒壊することはありませんでした。しかしながら、神戸市などは、大きな被害があり私も多少災害派遣活動に関わらせて頂きました。その後１年間、筑波大学で国際関係論を勉強させてもらいました。平成１１年当時の防衛庁は、現在、六本木ヒルズが所在する場所にございまして、そこで勤務をさせて頂きました。その後、研究本部に勤務しまして、そこでは２０年後の戦い方や装備の研究をしておりました。２年後に陸上幕僚監部の援護業務課に勤務しまして、皆様にいつもお世話になっております隊員の就職援護を担当しておりました。２０年後の世界の研究をしていた人間がいきなり目先の就職援護の担当となりまして、自衛隊は何でもやらなければいけない、何でも出来なければいけないということを改めて痛感した次第です。その後に、愛知県守山市にあります第１０師団司令部に勤務した後、陸上幕僚監部衛生部に勤務しました。私は施設科職種ですけれども、ここでは衛生関連業務などを担当しておりました。皆様あまり馴染みがないかと思いますが、自衛隊札幌病院が札幌市の真駒内地区に移転しました。その移転事業において、財務省に対し予算要求などを当時担当しておりました。私のポストは、私の両隣に防衛医大の先生方が並び、私は医療とかまるで判らないのですが体調を崩した隊員が、私の所に来たら、左右の先生に振り分けるみたいなこともしていました。船岡駐屯地では、第１０施設群長ということで、１７年ぶりに自分の職種である施設科の仕事が出来る部署に戻ってまいりました。ここは着任式を行った石巻の総合運動公園ですが、当時４月１８日、私は着任する前日に朝霞駐屯地で見送られ、その足で、交通機関がなかったものですから私有車に乗ってデコボ

コの東北自動車道を北上し、道路をピョンピョン車がはねる状態で仙台の南に位置します船岡駐屯地にその日の夕方到着しました。翌日官舎に荷物を詰め込んだあと、すぐ石巻のほうへ着任したというか、連れて行かれたというほうが正しい言い方ですけども、この総合運動公園で着任式を行いまして私の第１０施設群長としての第一歩が始まったわけであります。

それでは、最初に、自衛隊全般がどういう動きをしたか総括的な話をさせて頂きます。これは、仙台市の東に位置します多賀城駐屯地にある第２２普通科連隊という部隊の隊舎前です。出動しようとして車を並べていたところ、津波にのまれて車が流され、救援に向かうはずの車も被災してしまったという状況です。東北方面航空隊のヘリコプターには、映像伝送装置というものがありまして、写真や映像を方面総監部に送ることができます。そのヘリコプターから送られてきた名取市沿岸の津波の状況です。これは、気仙沼市で津波に伴い、ガスが爆発し火災が発生した映像です。ご承知のとおり東日本大震災では、未曾有の津波被害が広域かつ甚大に発生しました。この時初めて自衛隊は、陸海空の各部隊を一人の指揮官の下で活動できるように統合任務部隊というものを編成し、最大約１０万人の態勢でこの震災に対応いたしました。国外からの協力、特に米軍の協力も得て活動を行いました。更に、即応予備自衛官や予備自衛官が初めて任務で招集され、現場や駐屯地で活躍しました。福島では原発事故が起こりまして、大地震と原発事故の２正面での対応を強いられました。

３月１１日の発災直後から、直ちに全力で人命救助を行いました。１１日から２６日までの間で、自衛隊が救出した被災者は約２万名です。ピーク時の３月１３日には、１日に約４，８００名を救出させて頂きました。更に自衛隊は、一時期１０万人態勢で行方不明者の捜索や生活支援、医療支援及び輸送支援などを被災地の変化するニーズに対応しながら対処にあたりました。我々施設科部隊としては、仮設住宅の整地作業なども行い、住民の方々の安心感の醸成に努めた次第です。これは、統合任務部隊の編成表です。防衛大臣の下に先日亡くなられました君塚元東北方面総監がおられまして、陸、海、空の部隊が合同で震災対処にあたったことを示す組織図です。また、米軍からも約１万６千人が震災対応にあたりました。

これは、自衛隊の初動の経緯です。発災が１４時４６分で、１５時０１分には東北方面航空隊のヘリコプターが飛び立って、先ほどお見せしました津波や被害状況の映像を伝えました。１５時０２分に、宮城県知事から自衛隊へ災害派遣要請が行われました。これも何かの縁だと思いますが、宮城県知事は私の防大の同期でして、ちょうど３２年前、一緒に防大の門を叩いたわけです。非常に自衛隊の活動に対して理解を示してくれる知事で、活動しやすかったことを覚えています。被災当日から全国の部隊が移動を開始しました。私が以前に勤務をしていた名古屋市の第１０師団司令部も動き出しました。北海道は津軽海峡により隔てられていることから、翌１２日の７時３０分に旭川にあります第２師団の部隊が前進を開始しました。

５月に防衛大臣から指令がありまして、先ほども申し上げましたとおり全国から部隊を集中させ、１０万人の態勢ということに至ったわけです。東北方面隊での計画のひとつに、宮城県沖地震対処計画というのがあります。これは、宮城県のほうには第６師団と第９師団という２個師団があり、東北６県を３県ずつ担当しています。北海道ですと、第１１旅団、第５旅団、第２師団、第７師団の４個師旅団がありますが、東北では２個師団が青森県、岩手県、秋田県の北東北と宮城県、山形県、福島県の南東北をそれぞれ担当しております。さらに宮城県北部は通常、第６師団が担当し、宮城県南部につきましては、私が前任で勤務しておりました船岡駐屯地に所在する第２施設団が担当しております。余談ですが昔は、南恵庭駐屯地に第３施設団がありまし

たが、縮小して現在は北部方面施設隊になりました。来年の３月の改編で再度第３施設団に戻ります。これは各施設団が担当していた地域ですが、この２個師団では到底カバー出来ないほど震災が甚大だったため、第６師団が担当するエリアに九州から第４師団、四国から第１４旅団、あと南部の方については第１０師団とそれぞれ他方面隊の部隊が増員に駆けつけて活動しました。

これが、その時の部隊の集中状況であります。遠く福岡から、香川、広島、愛知、群馬そして帯広の第５旅団も駆けつけて岩手県、宮城県、福島県の特に海岸沿いに集中して災害対処にあたりました。先ほどの統合任務部隊で示しました陸、海、空の部隊ですが、全自衛隊で最大１０万６千名、航空機４９５機、艦艇５３隻。そのうち陸上自衛隊は７万名、航空機７５機。海上自衛隊が艦艇５３隻、航空機２００機、人員は１万４千名。航空自衛隊は２２０機の航空機と人員２万１千名で対処にあたりました。

これは各自衛隊の派遣規模の比較です。若干データは古いですが、東日本大震災の人員と阪神淡路大震災の人員、それと首都直下地震の計画で示されている人員規模と航空機数の比較です。東日本大震災は阪神淡路大震災の約３倍の派遣規模で対処していることが判ります。

ここからは、これまで説明させて頂いた内容を中心に写真でご覧頂きたいと思います。これは東北方面総監部の指揮所での活動状況です。関東にある自衛隊の学校や機関からそれぞれ勤務員を増強しての活動となりました。この写真には、海上自衛官もおりますが、海上自衛隊と陸上自衛隊が調整を行っているところです。これはヘリコプターによる人命救助の写真です。これも同じくヘリコプターによる人命救助の写真で、被災者をロープでヘリコプターまで吊り上げ、救出しているところです。これは船岡駐屯地の第１０４施設器材隊が渡河ボートを用いて被災者を救助している写真です。渡河ボートは、ＦＲＢ製で施設科部隊特有の装備です。これは石巻市で被災者の救助をしている写真です。通常は、災害発生から７２時間が被災者の生死を分けるターニングポイントと過去の経験から認識しております。３日間です。言い方を変えれば３日間を何とか生存すれば、通常の地震災害であれば、自治体の方や消防の方、警察の方、そして自衛隊が救出に来るという時間です。ですから、我々はこの災害発生から７２時間以内の救出に全力を挙げます。この写真は、児童のほとんどが津波に呑まれて亡くなってしまった大川小学校です。先ほど市長さんや防衛局長からもお話がありましたが、震災から５年が経ちました。昨年も地元の自治体や警察が児童のご遺体の捜索をしております。震災後に行方不明になられた児童のお父さんが、ご自分で小型の油圧ショベルを購入して、昼夜問わず捜索していたという話を現場で私も耳にしております。７２時間経っても生存されている場合も勿論ありますが、我々としては少しでも多くのご家族にご遺体をお届けするための活動も行いました。阪神淡路大震災で私も目の当たりにしましたが、地震被害だけであれば、瓦礫の下に必ず被災された方がおられます。残念ながら津波被害があったところでは、１００％の捜索は極めて困難であるというのが実態です。これらのいわゆる瓦礫が、津波で流されて家の中に入り込んできたわけです。この中におられるであろう方の捜索をしている写真です。中には避難している車ごと流された方もいました。瓦礫を１枚１枚剥がしながら、中にまだ残っているご遺体があるかもしれない、生存されている方もおられるかもしれないという気持ちで、隊員は活動しました。ここにあります油圧ショベルですが、グラップルというアタッチメントを装着してます。ちょうど親指と人差し指でつまむような機械で、これで瓦礫をつまみ上げて寄せる作業を行いました。これは米兵です。最新鋭の機械化された装備を持つ米軍も、この場では手作業で丁寧に丁寧に瓦礫を剥

がしたり、津波で壊れた工作物を片付けていました。これは米軍の輸送機です。これは仙台空港の事務室において、自衛隊と米軍が打合せをしている写真です。これは、一時避難所において、給食・給水支援を行っている写真です。一時避難所となる場所については、小中学校の体育館が多かったと思います。あと避難所のスペースや駐車場を利用して、食事を作って提供させて頂きました。これは５月末までのデータですが、多い日で最大約９万食、これを被災された方々に配らせて頂きました。水につきましては、多い日で最大約１千ｔを配らせて頂きました。これは入浴支援です。入浴支援につきましては、自治体の復旧状況によりますが、ある程度、被災者の方々が落ち着きを取り戻される前後からの支援となります。従いまして、活動の終盤まで行っていた支援活動です。

続きまして、私が所属した第１０施設群の上級部隊である第２施設団の全般の状況についてお話していきます。ここにありますように、東北方面隊が管轄する青森、秋田、岩手、山形、宮城、福島の東北６県のうち、第６師団が南東北の３県を、第９師団が北東北の３県を担任しています。私の所属していた部隊は、仙台の南に約３０㎞の船岡というところで、ここに第２施設団の本部があり、その隷下に私の所属部隊がありました。現在の幌別駐屯地に所在します第１３施設隊の上級部隊である南恵庭駐屯地の北部方面施設隊と同様に、第１０施設群の上級部隊が第２施設団ということです。北部方面施設隊につきましては、来年の平成２９年３月に第３施設団ということで改編が予定されています。幌別駐屯地の第１３施設隊も第１３施設群になります。施設団につきましては、私の所属した部隊も岩手駐屯地に１個中隊を配置し、福島駐屯地にあります第１１施設群という部隊も秋田駐屯地に１個部隊があります。ここが幌別駐屯地だとしますと倶知安駐屯地くらいのところに、そういった関係の部隊を東北方面隊として配置してます。

施設団の保有する代表的な施設器材と装備です。平成２１年度末に私が所属していた部隊は改編をしまして、新しく導入された装備品には、地雷原処理車、掩体掘削機及びパネル橋ＭＧＢなどを保有しています。この装備につきましては、北海道の北部方面施設隊と同様の装備です。これは９４式水際地雷敷設装置という水陸両用車です。この装備は１３施設隊の第３０２水際障害中隊が同じものを保有しております。全国の施設団には、それぞれ１個水際障害中隊という部隊があります。私が所属していた第１０施設群にも水際障害中隊が編成されておりまして、留萌市の北にあります天塩町の訓練場に私も何回か行った経験があります。これは９２式地雷原処理車というもので、幌別駐屯地では第３６０施設中隊に装備されているものです。これは９２式浮橋というものです。北海道内の駐屯地に配備してされている９０式戦車の重量は、約５０ｔありますが、この戦車を通過させることが出来る水に浮く橋です。この９０式戦車を通過させるため南恵庭の第１０５施設器材隊に装備されています。これは自走架柱橋というもので、７４式戦車や大きなトラックが通過出来る橋です。これは倶知安駐屯地に編成されています第１３施設隊隷下の第３６１施設中隊に装備されています。これは掩体掘削機といいまして、油圧ショベルですが、このバケットが３６０度グルグル回転させることが出来る油圧ショベルで、幌別駐屯地の第３８３施設中隊に装備されています。これはパネル橋ＭＧＢという橋です。この橋は作り方によっては、９０式戦車などかなり重量のあるものも通行可能で、南恵庭の第１０５施設器材隊に装備されています。この写真は東北方面隊で保有してますリモコン器材です。いわゆるラジコンで、油圧ショベル、バケットローダー及びドーザーなどを遠隔地操作するものです。これは当初原子力災害時に使用するために導入されましたが、未だ使用実績はありません。北海道においても、各部隊がそれぞれ分散管理しています。

この図は、第２施設団の災害派遣の任務地域を表したものです。北海道の施設隊と違いまして､施設団には宮城県仙台市以南の地域の災害広報隊区が付与されています。林野火災、土砂崩れ及び河川氾濫等の水害などの一般災害派遣においては、第２施設団で２市９町を担任しておりました。私はその中の１市７町を担当して、先ほど市長さんも仰っていました登別市と姉妹都市の白石市も担当しておりました。年に２、３回、この１市７町８人の首長さんを駐屯地にお招きし、意見交換会を開いておりました。各首長さんも非常に楽しみにしておられまして、その際に皆さん口々に仰っていたのが、災害が発生すると自衛隊は「〇〇市さん、異常ありませんか。」というようにそれぞれの担当中隊から電話をかけます。そうした時に意見交換会等で面識ある方からの電話なら非常に安心するとおっしゃっていたことを思い出します。やはり顔が見える、電話の向こう側の人の顔が想像できるということは非常に安心感を与えるものだと思いました。

第２施設団としての活動概要です。繰り返しになりますが、まず、人命救助からスタートをしました。これは名取市と岩沼市ですが、警察や消防などと連携して震災発生後の３日間で、２１９名の人命を救助させて頂きました。ここは更に南にある亘理町と山元町ですが、施設器材系の部隊が４４９名の方を救出しております。結果、東日本大震災の発災直後にこの第２施設団で６９０名の方々の命を救うことが出来ました。次のステージは、応急復旧活動になりますが、ここでは部隊を前に進めるために道路にあるごみや瓦礫を除去し、壊れた箇所を修復する作業も並行して行いました。これは仙台新港、名取大橋及び石巻市街地の写真です。それぞれに派遣された施設部隊が瓦礫を除去し、次から次へと道路を啓開して行きました。これはＪＸ日鉱日石製油所における作業写真です。あと石巻市においては、漁業が盛んですから壊れた冷凍庫の中に腐った魚などがいっぱいありまして、その処分も我々が実施しました。これはビフォーアフターの写真です。このように瓦礫が堆積した状態を綺麗に処理した写真です。これは地震で崩れた道路の復旧をした写真です。これは道路の啓開と補修の実績です。宮城県、岩手県及び福島県の３県で、道路の瓦礫などを除去した総距離は５２９㎞となりました。直した道路は２４箇所です。応急復旧活動のうち橋を架けたところについては、宮城県６箇所、福島県１箇所となりました。これは人が渡れる橋で、九州の部隊が作業を行いました。こちらは橋を架けるためにドーザー等を船で岸から岸へ移動させている写真です。これもＭＧＢパネル橋です。橋を架けることにより住民の方々が生活できるようになりました。これは松島の近くですが、ここでは島から島へ重機の運搬をしました。行方不明者の捜索段階では、通常の地震災害、今回の熊本地震のようなものであれば、先程申し上げましたとおり、倒壊した建物の下に必ず被災者がおられるという状況ですが、津波災害につきましては、一旦津波が来て引いた時にあらゆる物を持ち去っていくという状態になりますので、瓦礫を一つずつ剥がしていかないと被災者がおられるのかおられないのかも分からないという状況でした。瓦礫の除去につきましては、２つの要領がございまして、１つは先ほど言いましたグラップルで瓦礫を丁寧に持ち上げ行方不明者がいないかどうか捜索し、そして逐次瓦礫を移動させていきます。もう１つは瓦礫を全てダンプに積んで、どこか別の場所に棄てに行きます。２段階で行方不明者の捜索を実施しました。中に被災者がおられる、水にずっと浸かっている方もおられるかもしれませんので、丁寧に丁寧に作業しませんと、ご家族に返す時に傷が出来てしまうということがありますので、ここが一番苦労したところです。各町における瓦礫の除去の様子です。瓦礫除去につきましては、数値的なことを言いますと、阪神淡路大震災時に発生した瓦礫の約１０倍の１２０万ｔになりました。徐々に生活基盤の復旧活動が落ち着いてきた段階で、小学

校や中学校などの公共施設の瓦礫を除去する作業に移行しました。この上の写真は、石巻市立病院ですが、１階部分は全て津波で被災しまして、医療廃棄物などもいっぱいあり結構苦労したところです。病院の残った機能については、少し小高い場所の幼稚園を使って臨時診療所として活動しました。あと東日本大震災では、災害派遣史上初めて仮設住宅用地の敷地造成を実施しました。県や市町村から予定地として示された土地を施設科部隊が造成しました。こちらは第１３施設隊を含む、北部方面施設隊が敷地造成しました。このように第２施設団等は、様々な災害派遣活動を実施しました。

それでは最後になりますが、私が以前勤務していました第１０施設群の活動ついてお話します。

第１０施設群につきましては、皆さん馴染みがないと思いますが、幌別第１３施設隊より１０年早く改編をされ部隊の番号が変わりました。いまだに先輩方から「部隊番号がわからない。」と、お叱りを頂くことがあります。幌別第１３施設隊も改編当初は先輩方から同様のお叱りを頂いていたではないかと思います。第１０施設群の改編では、約２００名の人員が削減されました。これは私が所属していた船岡駐屯地です。桜の綺麗な駐屯地で池もありました。これは、綺麗だった駐屯地が愛知県から来た部隊車両約１千台と人員約４千名に埋め尽くされ、まるで終戦時に連合国の進駐軍に占領されたような状態になってしまいました。

派遣活動については、先ほどお話した内容とほぼ一緒です。ここは女川町ですが、この町だけ孤立してました。なぜ孤立していたかと言いますと原発があるおかげで、経済的には非常に豊かな町でしたが、高台以外は全て津波に呑み込まれてしまいました。ここで私は、生まれて初めてひっくり返った状態の電車を見まして、改めて津波の恐ろしさを認識しました。ここ女川町での行方不明者の捜索は、警察、消防及び自治体が主体となって行いました。我々自衛隊は、機械力で大きな障害物を除去することが主な任務でした。

ここからは各部隊の活動状況の写真を御覧頂きます。これは石巻市本庁地区の写真で後方が高台になっておりますが、ここ（高台）はほとんど被害がありません。この部分（高台より下）は、ほとんど津波にのまれて瓦礫を全て取り除きますと、このような状態になって、もうほとんど家屋などは残っておりません。現場で私たちスタッフが色々考えた結果､住民の方々がおられる目の前で瓦礫を全て撤去することにより、少しはほっとされるのではないかと判断し行いました。ご記憶のある方もいらっしゃるかと思いますが､当時の年末に放送された紅白歌合戦で長渕剛さんが歌われたのが、この被災した門脇小学校です。ここでは、私も瓦礫除去作業等を行いました。

先ほどもお話しましたが、東北の震災には即応予備自衛官も臨時招集され活躍しました。現役の施設科部隊の隊員よりも機械の操作が上手な先輩もおられ、非常に助かりましたし､また交通車両の統制等もやって頂きました｡生活支援は海沿いの岩沼市、亘理町及び山元町で行いました。炊事支援、入浴支援及び小中学校の校庭整備などです。これは入浴支援として地元の方に入って頂いたお風呂の写真です。子供さんの笑顔が我々の何者にも代え難いエネルギー源になって、よし明日もやるか。という気持ちになりました。これは給食支援の写真です。自衛官は必ずしも調理師免許を取得しているわけではないですが、演習などで、必ず自分達の食事を作りします。その経験を生かし給食支援を行っており、けっこう住民の方々に喜ばれておりました。この方は、震災の翌年に亡くなられました髭の殿下こと、寛仁親王殿下です。ご自分の喉の御病気をおして、石巻市までお見舞いのご視察をされ、我々には勿体無い程のお言葉を頂戴いたしました。また当時は、フジテレビの取材も受けました。第８師団長や研

究本部長を歴任された松尾幸弘元陸将のご令嬢の松尾翠さんです。災害派遣当時フジテレビアナウンサーとして石巻市に取材に来られ際に記念写真を撮ったものです。この黄色で囲んでいるのが私で、ちょっとにやけております。我々にとって一服の清涼剤でした。災害派遣活動を行っておりますと、災害は、様々な家庭に影響を与えるものだと考えさせられました。阪神大震災以前は、嫁姑の関係が非常に悪かったのに震災時にお嫁さんがお姑さんをかばったことで円満になったり、また旦那さんが奥さんをほったらかして逃げたため別れてしまったりと、様々なものが見えてくるわけです。

総括いたしますと、我々自衛官は命令があれば、自分の家が被災したとしても災害派遣活動に参ります。勿論、戦争は１番嫌いな人種です。我々が戦争に行けば、１番先に亡くなって家族を悲しませることになります。ですから我々が報道の中で画面いっぱいに出てきたり、「自衛隊が活躍しています。」なんて報道がある時は、世の中はあまり良い状態ではないと思っています。まとめますと、皆様に支えられながら、とりあえず存在は認められながら、尚且つ表に出ない。我々としては縁の下の力持ちであり続けるということが、平和なこの地域北海道、登別市であったり日本であったり、そういったことを我々は日頃から思って訓練をやっています。しかしながら万が一何かあった時、皆様の盾にならないといけないと思って隊員は訓練をやっております。今そこに頭がくりくり坊主の２０名くらいの隊員がいますけれども、これからもうすぐ卒業式を迎える自衛官候補生です。彼らはこれから一人前の自衛官となって、私のような年寄りの中で働くかもしれませんが、皆様の前で身を投げ出して活躍してくれると私は思っております。今、１番左側にいますのが私の部下ですが、彼らは実際熊本地震に赴いて、向こうで色々体を悪くしながらも現地で頑張って様々な作業を行い、無事帰ってきました。そして５月の連休も無いまま、また訓練をやるという状況で頑張ってくれています。若者が育ってきています。暖かい目で見守って頂ければと思います。以上でつたない話でございますが、終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

【講演２】

（陸上自衛隊第１３施設隊副隊長　小竹　義之２等陸佐）

ただいま紹介をいただきました、幌別駐屯地第１３施設隊副隊長の小竹です。幌別駐屯地には１年間勤務させて頂き、一冬超えてようやく慣れてきたというところです。本日は１５分間ほどのお時間を頂いておりますので、駆け足となりますが、この登別市に半世紀以上所在させて頂いております幌別駐屯地、こちらの概要を、災害派遣を踏まえながら、お話をさせて頂きたいと思います。内容についてはこの４つです。とくに幌別駐屯地の沿革、そして災害派遣等の実績、これについてお話させて頂きます。

こちらの画面につきましては、駐屯地の沿革です。幌別駐屯地につきましては、昭和２７年６月に当時の幌別町の議会で、警察予備隊の誘致を１票差で可決したことから始まったものです。その年の１２月に警察予備隊第５３３施設大隊、こちらが京都の舞鶴から移駐をしてきました。そして本隊については翌年２８年２月深夜に、こちらの幌別駅に到着したわけです。その際深夜にも関わらず、非常に歓迎を受けたと当時の隊長は記録を残しております。そして２９年、自衛隊が発足と同時に、第１０３施設大隊に改編をしました。こちらの「施設」という言葉ですが、施設とは昔で言うところの工兵であります。道路を作ったり、橋を架けたりなどが得意な部隊です。幌別駐屯地については、この施設科部隊が主力部隊として現在に至っているところです。昭和５１年に当部隊は第１３施設群に、そして平成２０年には現在の第１３施設隊に改編され現在に至ります。平成２５年には駐屯地６０周年を迎え、現在は６３年経っ

ているところです。先ほど中田１佐から話がありましたが、来年の３月にこの第１３施設隊は第１３施設群に改編をされる予定です。表を見て気付かれた方もいらっしゃると思いますが、昭和５１年に第１３施設群という言葉が出ておりますが、また来年に第１３施設群に戻るような感じになります。ただ戻るのではなく、やはり昭和５１年当時の第１３施設群と現在の多様な任務あるいは、多様な役割を担う我々としては訓練の編成装備なども変わってきており、この第１３施設群については平成の第１３施設群、新たな第１３施設群に生まれ変わるというようなイメージです。続いて上の図につきましては、昭和３９年頃、それから昭和６０年頃の駐屯地を上空から撮影した写真です。この赤いところが幌別駐屯地の本部庁舎を指しています。若干アングルが違うので全く一緒ではないですが、昭和３９年頃はあまり家は建っておりません。これによって、時代の流れというものを感じて頂けると思います。このような時代の流れの中で、幌別駐屯地の部隊がどのような任務を担っていたのかをこれから説明します。下の図は、土木工事と書いてありますが、創設当時は地域の復興や防衛基盤の育成のために公共性のあるものを施設科部隊で実施してきました。北海道内では約１５０件に及ぶ工事、登別市だけでも約５０件の工事を実施してきました。工事の内容としては登別市に関連するものとして、幌別中学校のグランド敷地造成工事、それから現在のサンライバスキー場の新設工事を実施しました。その外近隣の都市では、室蘭市の地球岬に通じる道路を部隊工事で実施してます。また白老町や苫小牧市においても部隊工事を勿論実施してます。また同時に、昭和３０年から４０年にかけては、地域行事のほうにも積極的に協力をしていたという資料があります。幌別駐屯地においては北海自衛太鼓が有名ですが、同太鼓演奏などで部外の行事にも当然協力してますし、また地区の催し物などにも積極的に参加をしてきました。こちらは、現在の登別市役所前での行事パレードの写真です。このように地域と調和を図り、信頼の獲得に努めつつ施設科としての技術や訓練を積み重ね黙々とやってきました。平成５年には、日本で初めて、カンボジアＰＫＯの２次隊に幌別駐屯地から部隊を派遣しています。活動範囲は登別市にとどまらず、世界に広がりました。次に災害派遣に関してお話しします。幌別駐屯地の災害派遣の実績です。スライドにありますが、北海道内においては約５０件の災害に部隊を動員してます。全国では３件です。最近のものとしては１番上に記載してますが、平成２４年冬季に鉄塔が倒壊し大規模な停電が発生しました。その際に毛布や発電機等の輸送・維持管理などの支援をさせて頂きました。また、５年前には行方不明者の捜索も２件ほど実施してます。さらに平成１２年と昭和５２年の有珠山の噴火に対応しました。写真にありますように平成１２年においては､第７師団の指揮下に北海道内の色々なところから部隊が派遣されて活動しました。幌別駐屯地としては、これら派遣された各部隊と協力しながら、堆積した火山灰を重機で除去する作業を行いました。駐屯地には第１３施設隊の他に、業務隊という部隊もおりまして、給油や給水、あとは食事などを担任しております。この業務隊が他から派遣された各部隊を受け入れて、被災地での活動を後方から支援しました。続いて災害派遣の実績で登別市に関連するものをスライドで紹介させて頂きます。これは昭和３０年代、それから昭和５０年代の水害等に伴うものを掲載しています。昭和３６年には登別市で集中豪雨がありまして土砂災害も併発したため、施設部隊の器材で対応しております。その外これは、渡河ボートを使って孤立した住民を避難させている写真です。昭和３０年代、４０年代は、堤防や河川がしっかり整備されていなかったことと、気象予報も進んでおらず、全国的に水害が多かった時期です。昭和３４年には伊勢湾台風が発生し愛知県や三重県の都市で甚大な被害があり、北海道の部隊も派遣されました。ただし幌別駐屯地からは派遣されておりません。このような大きな災

害に伴って、昭和３６年に災害対策基本法が制定されました。災害における防災若しくは減災の責務は地方公共団体も有しております。現在登別市につきましては、当然、防災計画といったものが整備されており、２年に１回は防災訓練を実施しているということです。これは、非常に大事なことで、私も東日本大震災の経験者として一言申し上げれば「平素の訓練以上のことは、本番では出来ない。」ということです。よって平素から本番に近い形で訓練していくことが重要です。これは地方公共団体だけでなく、住民の方も併せて重要なことだと思っております。続きまして、登別市に関連するちょっと変わった事例を紹介させて頂きます。これは昭和４０年に起きた熊騒動です。民間施設から熊が逃げ出したため、災害派遣として自衛隊が出動した事例です。もう５０年ほど前の話ですので、ご存知の方はあまりおられないかもしれませんが、私もこれを見て驚きました。こちらに当時の新聞記事を掲載しておりますが、登別市の温泉街を、小銃を持った隊員が歩いています。記事を見ますと当時、登別温泉小学校に約３６０名の児童がいたそうで、その児童の下校時を自衛隊が守っていたと記載されています。また逃亡した熊を自衛隊、室蘭の警察、消防署及びハンターの計約１００人で囲って熊を追い詰めたと新聞記事に掲載されています。このような事例も災害派遣なのかということと、災害派遣で武器を使うことについて、「んっ。」と言うのが正直なところですが、調べたところ昭和３０年代、４０年代には実際に武器を使った災害派遣というのが、全国で何件か確認されています。ただ現在につきましては、災害派遣は緊急性そして自衛隊でなければ出来ないという非代替性、そして公共性の３要件が揃わないと災害派遣が出来ないということを是非ご承知頂きたいと思います。続いて幌別駐屯地として道外の災害派遣を２件ご紹介させて頂きます。写真左側は阪神淡路大震災で、右側は東日本大震災です。阪神淡路大震災につきましては、自衛隊の派遣が遅れたということで当時、だいぶマスコミに叩かれました。実際、自衛隊の災害派遣につきましては、知事からの派遣要請が無いと出動出来ないということの理解が不十分でした。この阪神淡路大震災の教訓を踏まえて、それ以降の緊急性を要する場合については、市町村長からの通知でも災害派遣が出来ることになりました。最終的には知事からの派遣要請を頂く形になりますが、１つのターニングポイントになった震災であったと思います。当時の隊員の苦労話も併せてご紹介させて頂きますと、先ほどお話にグラップルという言葉がありましたが、阪神淡路大震災の時は油圧ショベルに対してグラップルという器材が非常に少なく、取り付けることが出来ない状態でした。こちらを見て頂くとわかりますが、本来、土を削る油圧ショベルのバケットで崩壊した家屋を解体してました。このことからも、当時の隊員は非常に苦労をしたと聞いてます。以降、東日本大震災については写真赤丸のグラップルをリースで借りられ比較的作業が容易に出来ました。そして東日本大震災以降については、油圧ショベル１台につきグラップル１台が装備されました。過去の災害派遣を踏まえて自衛隊は装備を充実していったというところです。東日本大震災ですが、昨年、当時の南三陸町の町長さんが講話をされて、お話を聞いてきたのですが、ちょうど第１３施設隊が南三陸町で活動をしたということで、町長さんは、「北海道の第１３施設隊　奥田隊長（当時）がいろいろ助けてくれた。本来、部外工事扱いとなり災害派遣の枠組みでは難しい仮設住宅の敷地造成など、どうすればできるか理屈を考え、無理を承知で作業をしてくれた。この時、できないのではなく、どうすればできるかという考えることが大事だということを教わった。」と言われおり、幌別駐屯地　第１３施設隊の成果が残っていることに感銘を受けるとともに、派遣活動における姿勢について気づかされました。続きまして熊本大地震についてです。４月に幌別駐屯地からも中隊以下約５０名の隊員を派遣したところです。これは北部方面施設隊の指揮下にありまし

て、北海道から九州へ移動を実施したわけですが、南恵庭駐屯地からの派遣隊員を連れて行く関係もあり、移動については小樽港から海上移動し、舞鶴港から陸上移動で九州に上陸しました。約１，８００㎞に及ぶ距離です。船で約１，０００㎞、舞鶴港から上陸しまして、九州まで陸路８００㎞を車両で移動しました。ちなみに幌別駐屯地の位置からしますと、やはり室蘭港から出航できるのが１番良いのですが、今回は小樽港からになりました。被災地には、熊本県の八代港まで海上自衛隊の艦艇で入ることができたと聞いております。活動につきましては、熊本市の東側にある南阿蘇村で活動を実施いたしました。スライドの下の写真ですが、目的地に近づくに従って、道路がこのように１．５ｍ、人の背丈くらいずれてしまって目的地に到着するまで非常に困難な道程だったと聞いております。また我々の部隊が担当した任務は、山間部の道路の啓開です。完全に道路が土砂等により塞がっていました。また我々の持っている油圧ショベルは非常に大きく作業現場に入るのが困難なため、現地で小さな器材をリースし啓開作業を行いました。作業を行った中隊長の話によると熊本地震は非常に余震が頻繁にあったことから、作業中に地震が来て二次被害が起こることが非常に怖く、何かあったらすぐ上を見て目配せ出来るようにまた、いつでも退避できるように気を遣って作業をしていたと言っておりました。

続いて我々の災害への備えについてお話しします。今、話に出てきたとおり、第１３施設隊若しくは恵庭の部隊につきましては、登別市や北海道内外への災害派遣を実施してきました。我々は、日本の防衛を主たる任務としており、そのために平素から厳しい訓練を実施しています。特に我々施設科部隊は、道路を作ったり橋を架けたりといった訓練を実施している以上、災害に対応できなくてはなりません。また、平素の訓練のほかに、即応性の保持ということで、部隊としては定期的に非常呼集を実施したり、指定した要員を１時間単位で常に待機させるということをしています。そして最も大事なところですが、関係機関等の連携ということで、我々は地方公共団体の防災訓練などにも積極的に参加させて頂いているところです。連携ということで参考までお話ししますが、現在、北海道には１７９の市町村があります。このうち３４の市町村については自衛官ＯＢを防災関係の担当者として採用して頂いております。このことにより市の防災訓練がより充実したものとなり、また自衛隊との連携が非常に良くなっております。ちなみに室蘭市、登別市、白老町及び苫小牧市で自衛官ＯＢを採用して頂いております。また現在、政府では国土強靭化政策といったものを進めております。これは地方公共団体や民間企業との連携を強めていこうというものであります。

続いて幌別駐屯地から地域と共にということで、現在の陸上自衛隊は多種多様な任務に対応をしなければなりません。幌別駐屯地におきましても、北海道や登別市だけでなくて、日本全国そして世界で活動しなければなりません。道内外の防衛、警備、多方面への機動展開、災害派遣、及び国際平和協力活動などを今後も実施することになります。一方で、我々はお世話になっております登別市で発生したあらゆる災害にも真摯に対応してきました。

最後になりますが､胆振地区そしてこの登別市に所在する唯一の施設科部隊として、常に災害派遣や訓練等々において、温かく見守って頂いている皆様にお礼を申し上げます。こちらスライドの写真ですが、平成２３年にハイチに派遣する際、隊員を吹雪の中、見送って頂きました。幌別駐屯地の協力会前会長の故沼田様、またその後ろには、本日いらっしゃいます堀井衆議院議員、そして右側には登別市長等々皆様に隊員を見送って頂きました。また先般の熊本大地震での出発の際につきましても、平素協力して頂いております自衛隊協力会、そして父兄会、隊友会、そして市民の皆様など

多数の方にお見送りして頂き被災地に向かいました。皆様の応援こそが我々の原動力だと思っております。引き続き幌別駐屯地への応援をよろしくお願いしたいと思います。以上で話を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。

以　上